外邦太平記

二

へ13
3493
2

へ 13
3493
2

早稲田大學図書館
昭26.9.11
藏書

外邦太平記巻之二

李白玉妖術を以故陣へ敷ぶ事

早稲田大學図書

前て清明戦ひを交へしが用も西ふりたむけを西別
迚とぶたり赤ろうに的兵い石阪城ふ入て赤たらく
つう迚をそ休めける時ふ天徳王元摩時位なる李白玉
洪武紀綱を石連れ矣含ふ出りて法らなる敵陣をそ
ろこせを官軍日本勝りめナ多服の軍兵原雅ふ与び
とり山ふ添ひ川ふ赤ろひ諸陳比陣中恐をそぐき
を陣幕清候大旗清山ふ風ふ靡ゞり数ヶ所の冊

り火天を焼き用心厳重なり武弟なりも李氏うしも驚く計りに大軍を李氏うしハ武弟ふもろつて曰く連なる陣く清水に性名を元帥知ゝそよ
帝れるくた軍師若へ信られよと言ふ武弟い従策千里陣に月陣をもつて遠ふ敵陣をえあらせい後中なれとを一天晴ゝ樂毛月ハ黄月ふ山北の屋ゝ晴れ明らふ見ふ見ら氏えくるふ武弟ゝ
陣びとくと陣をうて一書ふ見ゝ又ゆら紅白交ゝ
に陣幕に又色の手旗艶ゝくらハ先鋒壮江英烈と
知りゝくおゝ下りて見ゝゝえゆる陣幕張ゝを中

ふ青地の縁り文地白の幕花旗是ゝ副将に孫李玄
りん陣山寺の大伝を地の陣幕数ヶ所に幕り世縁り
白然旗をこたらハ大伝の惣成兼なり黄地の縁
り反唐黄旗ハ右伝に文李朝りん陣山を小橋ふとり
青白二段に陣幕なり又色の縁りふ白雄の大旗絆
に小陣を付たらハ是ゝ大将柏桂全光別寄りに
ゝ先ふ三角縁りとり紅ひに小旗絆ふ法に屋牛旗
ハ健羅深のそなへ也世重明天麻旗嚴ハ地白に角旗
金孔雀文より下りて右伝に又角の大旗元雲鶴
ハ人も勇ゝ勇将に羅金昌りんのそなへなりそれ不ら

乾高韓永欽とつゝちる陣くおふをまだ言語ふを
し雑きみ十万余の陣営兵荒きし戦中上る法こと人
といふふ。天徒王弦欲ト て曰く候沿列ふ美を上
明敏頗 嵩れ切をちさんとて ふ。大美出ひ之。是ホ ぐ
近をしふ今月今日清の猛将毅美人目に余りし。大
軍反りごむ。昭統の結奥いちゝんと曰ふ。例ふひ
ゑし本子白玉りゝ ハ微笑して曰く美見ゑくされふひと
つれ牛謀有美を仰ふとゝふ故を戦ゝうびして思ち
ふ滅じてみ十美軍の美二十美ふハゝうぐゝ美ゝん
異ハ赤ゝうぐゝと密洗ちふ法武弦りゝ ハ見牛り

ふとを笑て ちひふ脱び欲多上云られも又一牛を絶し
清云を流のぐゝふ手品さん云勢ひふ牛ず美ちちら
は大軍も一時ふをいそゝ出ぐし美ふをんで倚ちを
たゝ民をちつけて小系を二牛ぐし美ふ美ん裏ふ五と
勇を云れで天徒王弦ゝ ゝ欲び要傳脇涙ふ美と
ゝひを延を ゝ弦とちふ美白玉りゝ ハ異りふとたぐ
ちふ出びちぐゝとちり美ふ右弦滅を美ちりる美
てで美のび ゝ涙鄭ふ欲の倚ふ美びちくゝ味ゝく
のゝふさゝ美ゝちく洗ちとちあき陽美のえさたる
ぐゝく張を出ちゝゝぐ美ふ宦軍のゝり美ふ宦軍のゝり

大將拍掘全ハ皇氏戰ニハ九分の結利ありしふ
ゐひげかたき二の匠一李白玉と法武說とふに
ゑりたてられ先手級をあ一〜るを心中ふ勝ひ
るをくせめ付て一流ふ兵せ長んこられたい先ふをもな
ら強へ敗つ石城にて張良孔明が守ちともたゞ一戰り
攻崩さんとを夜の明ちをまんとりるあらに事氏
りハ敵將北孫李玄號ち杜江英北ち嚴寬孟昭
ちん苦ゞ陣中へ深く右のび入り大拍の一道吳ちる
寄方東配翁陰のちんん一拍より一ゞつ皆寄ひ
とりて玄後のうちふ石城へ帰りる時呼李

氏りゞが術のゆちうを敵陣ふいかゞも勝ちもれる
りる弱ふを夜も昭活りて攻うける陣鍋の軍奉
有附ふ董明の陣中ふい陰のえゝざるゆちり又嚴
寬ばハ翁みゝぢと陰き玄流ち杜江英北ハ又
孫李玄號りハ夫えの寄東配ちゝと言ふぞ
陣中ふていふ吳美ふ吳ひ陰きゝ張わちとハゝども
更に玄號しゝ氏後て清陳中ふ不寬陰きる
翁しゝも敵陣より書後を送ちふ矢ちひゝ寄
方寄配翁陰ち史ゝ北陣へ李ちふ寄軍い
益おとちき嘉き玄後を天ちふを文ふ曰く

佐竹義重陣へ来びし処に義重の夫婦
前後左右を従来れを推量てうがむるも
比なし別さて時軍ハ深く感服して死人の
如しまつて首を撫るの血をぬぐうに
安しあられども首を撫てハ大小の表
弦病といさん不仁とやいうん且又用ふハ仁
義をきり情深く物の命をひろうを好
まづ泥るふ清朝不波にして賞罰こゝろ
うるに秋霜を不改を勢き割愛を正
さんと天ふ智うて美を美をあげ慶東

瀬江を絶てこゝふ見る民ハ驚めて父母を
てうまつぶる四海の水を汲しをくを徳
を慕ふもれ多くうる大度の聖主四
を手のもれ又皆美をこんぜうつて
将軍が首ハ不撫られども陳を従来
せしあるしにあれ不くを奪ひとり立
帰りハあられとも城中ふ武兵美ハ
満ふ笑ふ不用の子ふハ〳〵ぞ迎上中と
迎出しも主を時軍が首をあるの勢卯
をあもてくぐ〳〵手をうすより

あを者しされども稍うごひされ老兵
陳器とのゝ号ひゝるゝで今言もかゝるゝ
系上せん用ひ苦ふまもりゝ之ゝ者うゝし
て後小類ひをれゝ之ハ素ゝて陣案し
時代腫瘍を掛りて出筆を生せゝ者
又遂ふて遂滞せで天の理弧阪へふあ
ゝるゝ事をやゝ也

月四　石頭城より

歌将中

前の如くに文西杜に英気い強絶りて去ひふ警戒
如中小類ひをれず又西自を先ゝども生牙斗りふ
乃ちして董旧ゝ厳寒ゝ孫素玄ゝ知ふ
を奪れし故是ふの者と後合いゝ自ゝ張さ後
日ふ乃り眼を象ゝ乃ち木あゝん子ゝ教督ふ知
らしむべしと拘猛全せんもの陳中へと者き後
右ハ決方を遂一かゝりめ母ハしても歌中ふ去
のびふ測ゝ者あゝと笑ゝたりと寡ゝも物
猛全せんもう大ひふ笑ひ是歌将の術策ゝう
味ゝゝの軍威を拉ゝんたゝふ形を斗吸と笑

これら是れ沢山士卒ふ皆せおだ勿ち信玄
のたくろれこり義ひのさきゝけ是ふるだ大
事なり ひせふくと云食めゝな陣くへ陣寄
るゝるをふてふるどりて毎日の城せふ宮くゝ我
明日いしふく攻義さんと毎夜い陣ふ岩重ねちりて
時すふ敵民りいふゝ毎を陣へ敵陣へ恵ひ
妖術を以て新兵の多く種ゝ此ふを尊ひ作りて
敵新又ハ中鎖ふを作ておく是ハ敵防き
ふゝくおどろれ此ちくを敵ふ多勢もちりけふ
忍軍ふ是を考るふひ色むとなれど是ふ此

沢山書卒士卒濃淡て大ひふ警を此上い戦ふ
たりとて彼ハとれ也一先ゝを立退きて身を
隠し法ゝ世此変をうゝひてゝを第全のたうり
をとも然らもと二人三人ヲ合せ是びゝふ義
行名を乗て引敵軍ふ十萬と笑へ一勢ひも四
五度此中ふ士卒大水義矣せて二十第ふを
是らざり名彼ハ武敵ぶゝハ是て人寄ふ
もれおれる士卒をむ一敵の拓子をうゝいを
毒動要を結処ふやりて士卒おゝへりをたりて
法武敵ふつ要ていゝく味ゝくれ孫異第ふ者

り及軍大ひふりたくひ忍れ陣く義をせいまれ
をや十人百ふハるをきざると始より法武弦ハ大
ひに悦びさくを者ての古寨を進ひ排ふ日も近付
しと頼りふ様義を伺ふふある夜霧深く様く
と四隅天寸の地を深し至久さくふ去れざりる乱
武弦ハ東白玉に向て曰く此城也
裏の謀策弟り常敬兵大半義矢たり陣ふ今
寄ハきり深く一物ふられを奇ひに敬を討事
此時ありまく軍を出し之と進めふ東白玉
多をおて戦もれをいふ大王ふやを軍

れ多紙りいくさんと云つく去人天徳王陣ふ小ふの
陣者をやをるに天徳五陣ふ歳歳ありそうくふ
軍を敗せると和議ある故法武弦大小ふ
将士打拓を集ふをでふ砦りふ小ふび多先
賈義き金系手陣ハ二百余人を引率し大筒ハ
艇を先手兼べ霧ふ隠れて迫く進て辰巳の方
より敬陣の横を攻に而ふ
大鳴し編鐘多くある故ふ大筒の玉皆砕ちて
怨ち陣屋ふを揺り粉々ふ小崩まくせめ之ふ戦
天文を考るふ鎮世の上刻ふ晴れて南風起

へし（是八李・呂玉思ひの術にて敵陣へ行柵硝の行る所を知る也）河に陸連赤號法
つゞく二節錦に大筒八挺買弟金条華
とれあらびれりて鼓く輝威蕃ばかそ寿へに赤塁
攻入よ敵八吋ほ兵滅じ弟子かところへし三中也つ大
筒猛火にあそれ蝦き佐へ忽ちくづれ懸し依まく
鄭金 柳天寵 章術旗 瞿陝に又萬人を
率し火薬十斗に用意して滞し込んで都統を無
經三に攻まず張道弘に一軍りて昭陵山に擾
代いて進行粘罹金を生捕る玉虎班と
八一軍引て流山博府に埋伏して落行敵を討の也

外徐經 李白玉急し一手を引率して戚珍壊兵
前後を当り不意の手当をおしえ多く手柄を
今書に有りと夢を忘れず喜びよろこび劍金
その人これ先手よりして降りし城をたおらしむ
敵保急く霧を乱してそぞ行徳文貴軍粘罹金
はん滅ぜる兵に心得人数れ兄弟でやりしと試
十萬済ふいまだざりける部下軍もまかしより家
へ加賀の云をたいんと使者を小宮へ出して加賀常に
む孫思を定めて城を攻落し元嘩を生捕ん
と係義を定め除くをやらせていくら河田を

遣り度るとて法螺ありれ

法螺貝集て官軍を破る事

去程に此兵の霧の深きを幸ひに敵陣に
近く進み寄て合を宣ひ八挺の大筒薬に
らづゝ陣立を四ツに分て佐渡へ向て
陣にいおしも初めさりける佐渡へとて雲霧の
金糸平三お岩の笛ふ八挺の大筒一度に打出
るれば打り初つる鉄砲に陽火入とる間に
勢ち数多の雷ち一度に鳴るが如く地動きして

信方ふもぐきどうと転たる有様天地も崩る
計り打り折しも南風吹起り車輪に成の大雨
雨降りとなる陣屋ふ雨ふり注ぐ風ふ吹
どく吹立ふ火を物ひ消く雲とあり雲ふ天
も黒ゝ雲ゝ地獄もくやけんと思れさ
り雲霧の金糸平三が言葉に成て喊を作て
責ふるふ官軍いふ言をうけて打ひふ声を
うゝ地火ふやられ死ゝ箭先ふうりあて
も付数知れず叫ぶ人ハ死人をふまへ〳〵音を
ふぞ官軍は大羽社に英気を奮ひ

李伯玉

とゝ法もちゐく与ふおの家迎いぢる大将ゑ〳〵のごとく
れを法会いそで此ゝんや四方海ふ和で紙を与氏
毎又信逆赤鄭法ハ賈茅き金糸弄ハ
ゞ大簡ゝ考をおの小夜軍の鞦成泰ふ信
く毛〻て全〻く大簡ハ梃巣口を拵へておきけ
れぞ之言い天北もくふ〻をり鞦兵ふ水の官
軍多ちにゑ百人一ハふ血糧りをて死〻たりを
係て信神ちひふ器上をゆ〻と滝新〻袋ふも
のゐく我先ふと逸ゆる鞦城蔭紙軍ふ引
を て紙ふ逸いぢる城を大ひふ信ふのり四角ハ

面と知立ゆ立豊横紙を小ゐ与ゆむゞふもけとを
ゆりる信逆赤鄭法ゆ知て鞦茅をあつ
ゆ央をゆ〻を南風裂安て横央多ち毛り敬の
信茅く小ゐ与法り毛ハ天ゆも為毛を拵ゆり毛又
和神にハ物糧全影城会信付と笑ゆりもゐに
新茅ゆ知て いく信付の吾ハ大軍ゆゐ信く
ゆゐくゆ付ゞと叫ぶといゐども皮軍ハ不会ゆ
ゆ毛信一もみだを信病ふ毛ゐ逸仕会して会
ゆゐふ信ゞを氏梅も小ゐゞ央茅ゆん風毛
毛ゐ央の五四方く敬り知ゆをとゐ〻ぶたちまち

脱より出る火鉄より明を臧を造りつゝ赤くなる
鄙金柳天冠りたりとて章昕崔璞
等の軍幸強旅寺を攻る勢ひ猛虎死のごと
地をうごかして攻るつゝ狗賊全八陽くふ西
つゝく道を奪ふてふけ西くを鄙金柳天冠
ちゝおわをたりたを塞ぎてうちうるまつて狗賊全
もも死力をはくしたゝかふ
ところに章昕崔璞どとおわをて切入たさ
しそさんで責たれば流るゝ狗賊全ところあ
こてふせたれたるをとゝろへ急ち臧をゞ川と

他り一起の軍を寒て入るこれい敵ふあゝ民家の
文素朝ふりく鄙金柳章昕の軍兵を三三三
ふ助ふる是を見るより狗賊全ゆ兵ふ来ま
し後ふ一方の血路をひらきふ方さてを逃るふ城
兵傷ひて退る故之し合せたくひかゝ近ちと
やる味ふくをうれふ潮くふ天百濤ゆりと敵ふり
むふを見れを一ツの山を明陵山と名付たり狗賊
全ふ去の山ふ坐らんと寄るに皆より立ちち
臧を送り明の勇将張道弘殺を搦つて長
一寅とをくる勢ひ獅く王の五さ度ふ狗賊全

に震へ居られ逃るふたをくく絶体絶命引出し戰ふ
を処に虎軍比男將羅金昌ハ名乗りけ無謀を
分て乗来り多月力を打振り強之のあるを
見て明物張通弘てくるる者人とも不望く
る雑將力人交もせび み十余合戰ふところ虎軍
ハ力ぞく打破られ敗敗軍を羅金昌も余心弱
り疲れ叶ふと見ひるんを正て逃出
を張通弘てくるる すくさび係の老兵張ふ羅金昌
ぐ与の屍を寄られぞ捕りよ与ハ勇ち陽与
ものふ与ふたたくさび羅金昌ら蒙ると又へしぐ

名を正ぐ求つくと立る不業敵も味方も感じける
時ふ張金昌ぐ手ヤの去を開けて逃げたり
是より先物猛全ハ一方切れけ作を求ふ
行流山の林郷より一方蒙軍寄く張物と知とく休へ
一度ふ名り立張ぶ手を小て元開くをやひしくと張ち
多与中ふ大物敵ハれ和戦ハ明物の玉虎班ぐ
敵物猛全ふ名る与と捻を捻つて実入ふ猛
全 今ハのぐ与ふ与と流り合出義を苦て
義ひしぐ投ケ鄰の手底ふ牙鬱男れ絡ふ玉虎班
ふ対出る立物対出て物幸行ふて〳〵驚き脇

敵に向て矢を放つ事あり皮軍の法は杜江英孫
李玄靖り魏成兼に向ふ皆一方を守れりて
ふ京さしてふけ義こり法又明は法武能ふの孫臨
的をこづさに寄く敵は矢を長ひ構ひ若大は猛全
を射矢脱び雷く劇奇を稼へこと く物識ひく
しる城中ふい天徒王味方利あを脱び酒肉飯
菜を射多ゆして法士の労を休め衆疲しるふ士卒い
肉を嚙ゝ猛勢くを奮て強びる四方の賊民に
先を爭ふて降参し皆降ふ降ふり法又少家
い寧武曲の進やふすり猛猛全を指揮使の織

として大軍を授け南京の織軍ふ向ひしあるふ器斗ぐ
んや織の孫斗ふ義人り大敗軍を之猛猛全ゆ〳〵ふ討死
したりとふ天子ふ養生ふ驚きふ又別〳〵ふ織
は勢ひ盛なりを表文を作て奏〳〵ふ帝い病ひふ
深んで常く政事を省まび怠るふ叶日病ひ発ふ家
ふて朝廷ふ御ふて万々を省まふ宦人呉金陵に
列りふり皆事の病ひ発ふ器軍を養毛又敵敗
の友人言奏ふ曰く今天下の内ふ半あゝ天子へ
奏皆あを紅年ふゝび延朝あを と言是例式ふり
は附寧武曲を〳〵ふ出先を作て奏皆敗せ〳〵江西の

孔平淳

寧武曲

織軍に方を送り民を害し貪獣ふして長月
を知らず法制の表軍も是を割せらるる不能よって
勅命を蒙り物怪全討ぬ敵為を率して攻たれども
織運法なくして物怪全討死ふ也先天下に敵なふ
も比あるまじ此上は帝御幸なして退治ぬ之旨を
奏とありて武勇激まんと言上也此時孔子源
曰く寧武曲の宗考大ひふ遣ひり我皆織中ふ
事ふ知りたくと言も此寧御を先ひ又法武院
い長書ふくらくく金殿の進退侮りぐく物怪全
討ぬ勇ふて長を半ふ軍師ふあらべ長を長ふ

ていんを侍州ふん士を半ふ乃を以て也通明ふ多
らされを猪を法也明らふあらべ猪ぬと云ふ和ふ況や堂
は那織おやふるふ高ふ大軍を義ふ自ら割ふふと知
いふく織大敵ありと天下の吉ふ民を懐き織威ふお
それ海ふ民も為ん為ふ和て拓を堅ふ狂ふ為ぬ
ふ為ふ為ぬる比主人の明士を又却揚ひて元帥と也
道を竺攻討ふ元帥ふ事氏ふを刺とせんや一巻して
亡ぬべし陛下宜先高ふと曰侍ふふ寧武曲大
ひふ怒て曰く孔子源ふ忠の言系一程為ふ似たれ長生中
ふ不忠の如あり物怪全ハ元帥ふ敵ふ班ぬと

猛全

織を養ひ味方の威を振ひ左程時ならふ倩教を知りあい
猛全討ふ向ふときは帝を猶ほて止め時を待ひて
情をとゝぐる史倩欲いを討の機ふ為に物猛全せんかい
臣故を場をさゝげ討死して武名を天下ふ留せり雖文
業に及ばんやあるべきある者討ふ指向ひ上級をるあらい
天下は大なるあり依て雖業と撰すんより帝自ら御幸を
い天ガ下の表先を考ひて出戰ひ激すん河出兵織兵野武
と偽り一挙ふ天下太平を唱へん孔平孫しんを
見く物猛全せんい出兵等勇といども織兵ふ行向ひ出兵
いふせん見兵を考ふとつくられ理物猛全せん

を任に寄らさる出 案一之されでとて帝は自ら御幸い
余り怪くしきふ似て等全の徒るあゝ我主人の名を
知る是を揚利ひるで一戦ふ織将元曄等を亡ぼして
平均する王常をさしガ王しい人明別延清の者ふして
性ハ呉名を陣友ちんとふ能無者ふを一天文地理ふく
うくを能世の人ふ情れくり是指揮師ふ出るべーとやふ
で帝叡冨ありて勅命有い孔平孫しんが進め一理
あるふあゝを能有情れし者とあれでなかーて又養
あゝん後日朕が同通りくれせとある孔平孫しん伝のを
陪弥爾ーて退ものけ附ふ密武曲れいふ已を言

を曲て無をふくひ義を養ふと雖とも孔子深く感
ぶられ身ひられざるを深く憤りを抱ふ退却あり
り

外邦太平記巻之二 終